

# 姫落とし伝説に由来する稚児神社を訪ねて

2023年4月15日・27日

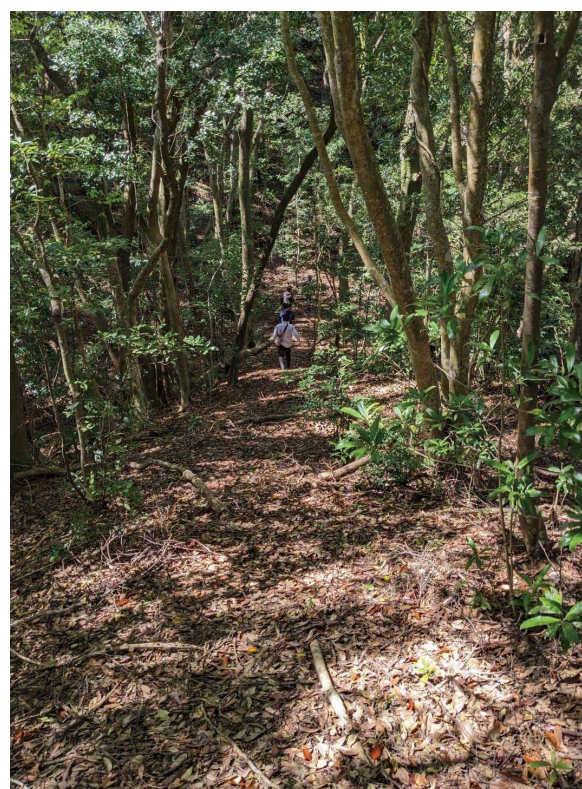
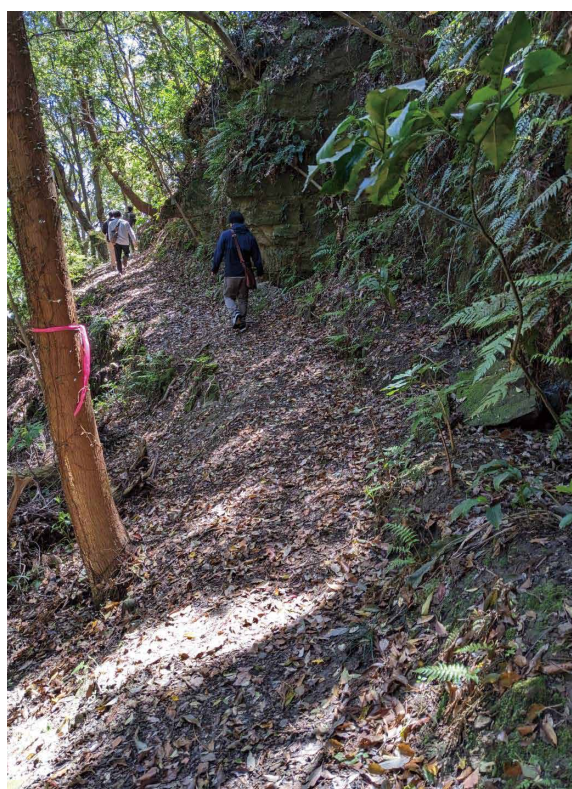
佐世保史談会 垣田鉄郎

吉井町の直谷城には戦の際、城主が幼い姫を逃がすため、城北端にある高さ28メートルの断崖からつり降りしたところ、失敗し転落死させたとされる「姫落としの伝説」がある。伝説に由来するといわれる**稚児神社**の事は以前から気になっていた。

神社は吉井町の**前岳**にある事は分かっていたがその詳細な場所はGoogleマップにも表記されておらず不明であった。この度、ご縁があり吉井町の前岳氏に案内して頂けることになった。

前岳氏の自宅はその名の示す前岳の麓にあり、古くより前岳周辺に住んでいた一族との事で、稚児神社は前岳一族が代々護ってきた神聖な場所であるとの事であった。

前岳氏の案内のもと車でお橋観音の脇道を登り、途中左折して山道をしばらく進んだところで車を泊めた。平戸八景で名高い御橋観音石橋の裏手に回り込んだあたりの位置である。そこからは山道を歩いた。それらしき標識はあるが老朽化して文字が読めなかったり倒れていたりしており、案内人がいなければ辿り着けるかどうか分からないような道筋だったが、このような山道は昔から使われていた古道で昔のままの姿が残るある意味貴重な場所なのだろう。途中、古窯の跡や洞窟遺跡ではないかと疑う洞穴などを見ながら、20分ほど山道を歩くと、登り坂の向こうに鳥居と青い空が見え、開けた場所に出た。ここが稚児神社か、眺望の良さに思わず声が出た。



洞穴の中には人の手で削ったような四角のくぼみがある。



稚児神社への登り口



7mほど四方に切り開かれた空間には、小さな石の鳥居があり、鳥居の奥の一段上がった中央に大きな祠、その傍に小さな祠と石像が鎮座している。鳥居の内側からはとても見晴らしが良く、鳥居を出て一段降りたその先は目も眩むような断崖絶壁である。まるでこの神社の参道は天につうじているようだ。なんとも神聖な空気の漂う空間であった。



正面から見た鳥居



稚児神社に鎮座する3つの石塔



鳥居の内側から見た眺望

## 稚児神社に関する吉井町郷土誌の記述

昭和41年初版発行の吉井町郷土誌には稚児神社のことについて以下のように記されている。

### 祭神 内裏山姫神

石のほこらに鎮座、銘に「**明治二八年再建**」と記されている。旧ほこらには記銘がなく、勧請年代も不明である。

伝説によると、この神は**直谷城の姫君をお祭りしたもの**という。**昔、前岳田原は姫の化粧田であった**。なお、姫は直谷落城の折、布七反をもってつなぎ、猿とともに城さいから逃れたが、不運にも布が地上におよばず落命されたが、猿は生きのびた。この猿は姫がかねてかわいがっていたものという。この「**姫落し**」の物語りは広く知られているが、猿についての伝説はあまり知られていない。

前岳は、三百年以前は福井村であった。こうした浅からぬ由緒によって姫を神として祭ったものと思われる。

この神には愛児のためや、その他の祈願のために、近ごろまで人々が絶えず参詣したものである。祭りは霜月の二番卯の日に限られたエト祭りが行なわれている。



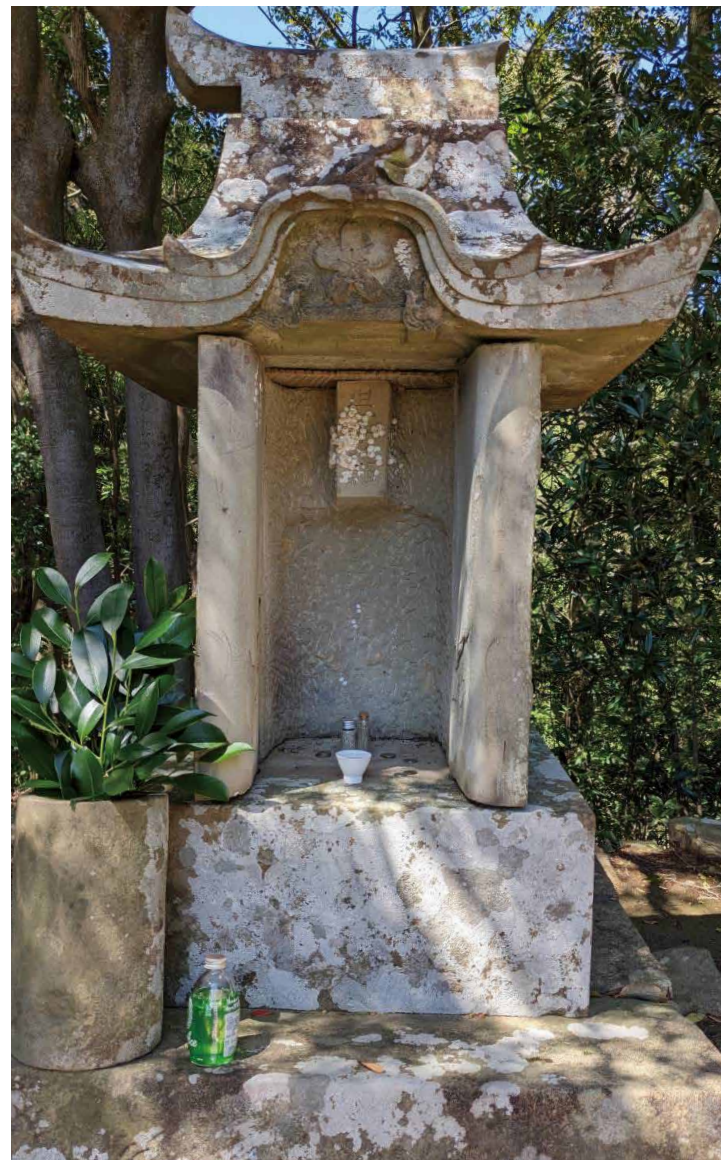
稚 児 神 社

郷土史に掲載の写真  
この頃はまだ木製の鳥居であった





未  
六月吉日  
再建主  
前岳産子中



中央の大きな祠(明治28年再建の銘)



明治二十八年



## 明治28年再建の祠

中央の大きな祠には、正面に桜の紋、左右に月と太陽だろうか、波兎も刻まれている。側面には菊の紋と「**明治28年(1895年)前岳の人々により再建**」との内容の文字が刻まれている。

今回特別に祠を開帳していただいた。以前は祠の中に石像が安置されていたが、現在は麓の**熊野神社**に移されている。場所が場所だけに参拝に出来ない方に配慮してとの事であった。現在、石像があるべき場所には出雲大社から持ち帰ってきたというお清めの砂が置かれていた。

前岳氏の話と郷土史によると、側にある小さな祠が元々あった旧ほこらで、明治28年に前岳の方々が新たに再建したのがこの大きな祠である。



熊野神社に新しく建立された祠の中に遷宮された石像。明治28年に再建された祠と同時期に造られたと思われる。

※産子中(氏子中)=同じ氏神をまつる人々。氏子一同。氏子の仲間

## 旧祠

小さな祠は旧ほこらと言うことで、大きな祠より古いもののようなのだが残念ながら記銘は確認できない。今後石仏専門家に見てもらいおおよその年代が分かればと思う。

吉井町郷土誌の姫落しの伝説の項のなかで「**吉田の前岳に姫の化粧田があったので、土地の人が姫をいたみ「城力鼻」に姫の霊を祭ったのを、化粧田のある前岳に祠を遷した**と伝えられている。今前岳の稚児神社がそれである。」と記されている。

「城が鼻」とは姫落としの崖の事であり、この小さな祠はもともとその辺りにあったものをある時期にこちらに遷したと思われる。その時期がいつなのかは不明だが大きな祠に刻まれた明治二十八年以前の話しである。



小さな祠(旧ほこら)





# 旧祠に記銘を発見

踏査というのは同じ場所であっても行く度に不思議と新しい発見があるもので、2回目の踏査の際に1回目には気づくことができなかった旧祠(小さな祠)の基礎部分に、よく見ると何か刻まれている事がわかった。

中央に「**前岳村 寄進**」の文字は読み取れるが、その右側に刻まれているであろう年代の部分がはっきりとしない。「**寛政十二 庚**」と刻んでいるようにも見える。石造物研究家の大石先生に小さな祠の写真をお見せして確認をお願いしたところ、祠は近世塔ではないかとの解答であった。そのことからこの祠は江戸中期～後期に造られたものである可能性が高い。しかし、再調査して拓本をとるなど、はっきりとした文字の解読が望まれる。

寛政12年に寄進されたものと仮定して稚児神社の一連の流れを考えてみると・・・

永禄6年(1563年)直谷城の落城で姫が落命して237年後の寛政12年(1800年)に姫の化粧田があった前岳村の人々が姫の霊を祀って姫が落命したと伝わる城が鼻に祠を建立する。その後、ある時期に前岳へ祠を遷す(稚児神社)。そして祠の建立から95年後の明治28年(1895年)に再び前岳の人々により前岳の地で新しい祠が再建される。といった流れだが祠が建立される以前の237年間は何もなかったのだろうか、またひとつ疑問が生まれた。

□ □ □  
**寄進** 前岳村  
□ 政十二 庚

## 石像

旧祠の横に小さな石像がある。今のところどの資料に記載が見当たらず前岳氏にも由来は分からない。着物のような衣服に錫杖か宝剣か右手に何か持っていたような形跡がある。記銘も確認できず年代も不明だが、見たところ旧祠と同じ風化具合で、同時期に造られた可能性がある。この石像も旧祠と一緒に城力鼻から遷されてきたものだろうか。

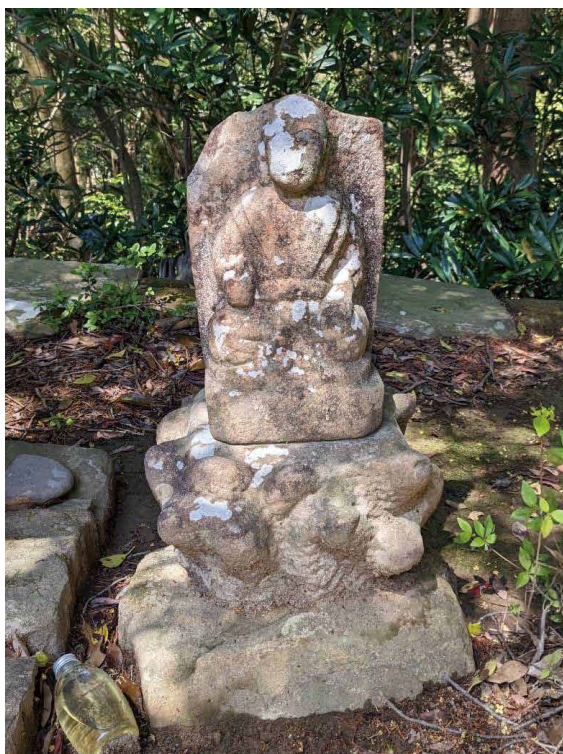
## 地蔵堂の庭にある観音像

稚児神社に関連する石像が別の場所にあるという事なので調べてみた。

～以下吉井町郷土誌・地蔵堂前岳(東立石)の項より～

伝説に「これは内裏山のお姫様を祀ったものと言われている。昔は部落の稚児神社のところにあったが、いつの時代かに地蔵堂のところへ遷された。その由緒は不明である。稚児神社に参拝することのできないときは、この石仏によって信仰してよい」と申し伝えがある。

前岳の麓にある地蔵堂の庭に観音像があり、郷土誌によると天明8年(1788年)建立だという。稚児神社の石像との関係性があるのだろうか、その姿は着物を着た幼姫のようにも見える。



旧祠横の石像(稚児神社)



地蔵堂の庭にある観音像



# 姫が所持していたと伝わる懐刀の話

今回の前岳氏に伺ったお話の中で一番印象深かったお話しがある。今から22年前、前岳氏の身内の方が所用でお寺を訪ねた際に「身内の不幸に気をつけるように」との注告を受けた。数週間後に実際に親戚が亡くなったことで、再びお寺へ行くと今度は「狐を探しなさい」との助言を受けた。亡くなった親戚の実家の物置に狐の剥製がしまい込んであったのを思い出し、お寺へ持ち込むと狐の剥製を祭壇へお祀りしてお焚き上げをした。その際に住職いわく「近頃稚児神社を詣る人がいないので詣ってほしい」「山には3人の姫がいる」「鈴を見つけてほしい」「姫の小刀を見つけてほしい」などの狐からのお告げがあった。前岳氏は稚児神社の事は聞かされていたがほとんど足を運んだことがなかった。3人の姫の話は謎だが、鈴の話は、狐いわく「稚児神社から直谷城までの道筋のどこかにある」「今でも鈴の音が鳴っている」とのことだが、皆目見当もつかず見つからない。最後の「姫の小刀を見つけてほしい」との願いを叶えるべく、前岳氏と身内の方で稚児神社付近を探したところ、大きな祠の裏側の石と石の隙間を覆っている苔を剥がしているとそれらしきものを発見した。長さ25cmほどの小さい刃だった。持参していた御神酒で洗い流し、祠にお供えしお詣りした。石と石の間に挟まれていたことで酸化を防ぐ事ができ、金属類回収令なども免れたのではないかとこの事であった。

霊的事象の類は信じていなかった前岳氏はそれまで半信半疑ではあったが、それ以来今日まで22年間ひと月に一回は欠かさず稚児神社へお参りするようになった。それからは前岳氏の周辺での不幸はおこらなくなったという。

この小刀が本当に姫の小刀であるならば、永禄6年(1563年)直谷城の落城で姫が落命して祠が再建される明治28年(1895年)までの332年間の間、誰かが大切に保管していたものを祠再建時に盗まれることを危惧して誰にも分からないような場所にお供えした。という事なのだろうか。もしくは元々は旧ほこらに供えてあったものを祠再建時に移したなのかもしれない。

形状は小刀というよりは薙刀の刀身のように見えるがそれにしても小さい、子供用の薙刀？薙刀には護身用として女性が使用していた歴史がある。「姫の小刀」と称しても間違えではないのかもしれない。



発見直後の写真(2001年)



現在の写真



# 最後に

姫の小刀の不思議な話はどの資料にも記載されていない話で、専門家による遺物調査なども行われてはいないが、前岳の方々が代々大切に守られている信仰であり、本来は外部のものが口外することでもないが、今回は特別にお話ししていただけた上に資料の公開も許可していただいたのはありがたいことであった。今まで自分の中でなんとなく昔話であった姫落とし伝説の姫の存在が、実在した人物として急に身近に感じられた何とも不思議で貴重な体験をさせていただいた。

今回前岳氏は明治28年再建の祠の修復を九州宇鴻有限会社の山口さんに依頼されていた。再建から今年で128年。また新たな手が加わり、次の世代へと引き継いでいく。前岳氏が「皆さんにきて頂くことで稚児の神様も喜ばれる」との話をされていたが、そうであれば本当にありがたく喜ばしいことである。



稚児神社の近くにある「眺め岩」の上でへっぴり腰の私



直谷城には戦国時代の姫落としの伝説の他にも安徳天皇伝説もある。壇ノ浦で敗れた平家の安徳天皇がこの地に落ち延びてきたという伝説だが、時代が違えど幼姫と幼帝が主人公の2つの伝説は少々混同する。前岳の稚児神社は戦国時代の姫落としの伝説の幼姫に由来するものであるが、稚児という呼び名や石像の形容などをみるとどこかしら安徳天皇の影が見え隠れする。

現在直谷城天守台跡には安徳天皇を祀った内裏神社があり、祠(安政4年(1858)建立)と安徳天皇の御像(昭和37年建立)が鎮座している。